

第16回ピア・スーパービジョン報告（聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョンセンター主催）

著者	五十嵐 成見
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.25
号	No.2
ページ	19-20
URL	http://doi.org/10.15052/00002851

Title	第16回ピア・スーパービジョン報告（聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョンセンター主催）
Author(s)	五十嵐，成見
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.2, 2016.3 :19-20
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5649
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョンセンター主催 第16回ピア・スーパービジョン報告



上段：柏木昭名誉教授 相川章子教授 山田裕太氏(総合司会)

2015年10月10日(土)、聖学院大学4号館第一・第二会議室を会場に、「第16回ピア・スーパービジョン」(聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョンセンター主催・SWnet [聖学院ウェルフェアネット] 共催)が行われた。午前中(第1部)に講演及び鼎談を行い、ランチ交流会を挟んだのち、午後(第2部)にスーパービジョンを行い、少人数グループでの討論による共同研究を行った。開会の挨拶は、中村磐男氏(聖学院大学こども心理学科・人間福祉スーパービジョンセンター長)、及び深瀬久博氏(SWnet)が務められた。第1部の講演は、柏木昭氏(聖学院大学名誉教授、聖学院大学総合研究所名誉教授、人間福祉スーパービジョンセンター顧問)が担当された。鼎談は、柏木昭氏、深瀬久博氏、川田法子氏が担当され、相川章子氏(聖学院大学人間福祉学科教授)が司会を担当された。午後のスーパービジョンでは、冒頭で助川征雄氏(聖学院大学人間福祉学科教授・人間福祉スーパービジョンセンターSVR)がミニレクチャーを行い、柏木氏が最後のコメントとまとめを述べられた。

はじめに柏木氏による講演「スーパービジョンのすすめ」の内容を端的に言及する。

ソーシャル・ワーカーとクライアントとの関係

は、相互主体的でなければならない。ワーカーがクライアントに対して受動的になるのではなく、「協働」的に関わり合う。これがソーシャルワーカーの専門性にとって重要なことである。ワーカーは、クライアントのこぼに傾聴し、その裏にある気持ちを受容しなければならない。ワーカーは、想像力と注意力、そしてコンパッション(compassion、共に痛みを担う、comは「共に」の意、passionは「受苦」の意)の持ち主であるべきである。このコンパッションを語る文脈で、柏木氏は、キリストの十字架の受苦愛に言及されたことが印象深い。

さてスーパービジョンの定義は、7つ挙げることができる。

1. 職員の力量の開発と専門性の発達。
2. クライアントへのサービスの向上。
3. 熟練した専門職員の初級職員に対する専門的支援。
4. スーパーバイザー(SVR)とスーパーバイジー(SVE)は原則として同一職種。
5. 異職種間の相談助言はコンサルテーション。
6. クライアントとの「かかわり」についてSVE自身による点検をSVRが支援する力動的過程。
7. 職員の実践が施設・機関の機能とのかい離を起こさないように、SVRが支援する過程である。



上段：助川征雄教授 深瀬久博氏 川田法子氏 柏木昭名誉教授

ソーシャルワーカーの職務における苦悩を、自己解決的に解消する作業は、とても困難な作業である。よって、スーパービジョンを行うことは、互いに、積極的に問題解決に取り組む姿勢として相応しい。スーパービジョンによって解決を得るために重要なことは、SVRがあくまでもSVEのサポートに回れるかどうか、である。

スーパービジョンの目的は、私達の抱く常識的枠組を超えて、クライアント自身の思いに沿う「かかわり」が持っているかどうか、の点検である。そして、この課題をスーパービジョンによって克服するために重要なことは、SVRがSVEに対して「かかわりの保障」を持っているかどうか、である。

「鼎談」では、聖学院大学の卒業生である深瀬氏、川田氏兩名を交え、柏木氏の講演へのレスポンス及びディスカッションを行った。川田氏が、「講演によって、クライアントとのかかわりを一番重視しなければならないことを確認したが、事務処理などの多忙さ等で、つい見失いがちになるという課題を抱えている」、と述べられた。それに対して、深瀬氏は「自分の限界を知り、できることからかかわりを捉えていくことが大切ではないか」と言及された。この意見に対して柏木氏も深く同意された。

ランチ交流会は、スーパービジョンを行う信頼関係を培うのに適切な、温かな雰囲気になった時となった。特に会の最後に、助川氏のギター伴奏によって「今日の日はさようなら」を合唱したひと時は大変印象深い。

第2部の「ピア・スーパービジョン」では、少人数のグループに分かれ、実際にスーパービジョンを行った。内容は議論の性質上割愛させていただくが、一人一人が率直な意見を出しあうと共に、現場で働くソーシャルワーカーが、立場を超えて聞きあい、他者の意見を否定することなく共有することを重んじていたことが印象的であった。出席者22名（講師含む）。

（文責：五十嵐成見 [いからし・なるみ] 聖学院大学大学院博士後期課程）